

—私たちの決意—

これから100年の間にこの土地にあり続け、人々の日常生活を豊かにすると共にその安心、安全、安定の拠り所となる学校をつくる。

建築を通してこの土地の悠久の歴史を振り返り、その記憶を留めること。今を生きる人々の日常を大切に後世に伝えること。未来を羽ばたく子供たちの夢を紡ぐこと。これら建築が持つ宿命を超えて、学校建築を通して教育そのものの一翼を担う。

それゆえ、理想や流行に偏ることなく、この事業にかかわるすべての人々と現実の課題にまみれ、苦勞を分かち。

(1) 明快で、しなやかに強靱な空間構成

- 正門から校舎昇降口へ導くアプローチ路は西側に向かうゆるやかな登り勾配で芝生広場を囲むように曲線を描き、それに沿って体育館、校舎を配置することで、校地の西側に新校舎（イエローゾーンから離隔）、東側にグラウンド、中央北側に芝生広場をとる明快な空間構成ができる。
- 校舎は個から集団へと自在に学習空間を分割できるマルチユニット（一定の面積を持つ2層空間）を複数連結してできる棟によって構成する。これはあらかじめ決められた多様な学習空間を配置する従来の方法とは異なる。
- アプローチ路は歩道を明確に分離して設け、中心部のエントランスロータリーへと導く。（正面の展望デッキの下に給食搬入口を設け、給食車両のみ定時に歩道部分を横断する）
- 既存駐車場から昇降口への歩行者アプローチは校舎とグラウンドの間の校内通路を利用し、歩車の分離を図る。
- 東側にグラウンドを設けることで北東向き良好な野球グラウンドが確保できる。
- 教務センターはエントランスロータリーとグラウンド、芝生広場を見通し、安心、安全、安定の要とする。
- 芝生広場を地域の子どもの遊び場として開放すると共に、将来の小学校統合用地とし、増築後も一定の芝生広場を残しつつ、変わらない校舎とエントランスロータリーの関係をつくる。（昇降口からグラウンドへの動線は増築校舎にピロティを設けて確保し、増築校舎から体育館への屋内動線は2階ブリッジで繋ぐ）
- 創造の中庭を境に渡り廊下によって体育館を含むコミュニティエリア（木造一部RC造）と学習エリア（鉄骨造一部木造）にゆるやかに区分する。
- 災害避難所機能については③防災トピックに記載する。



【北西方向からの鳥瞰イメージ】



【1階学年ユニット、2階教科ユニットからなるマルチユニット】

【マルチユニット連結による校舎棟の構成】



- 凡例
- 将来の増築
 - 既存校舎
- ① 緩やかなスロープを登るアプローチ路（歩車分離）
 - ② 深い屋根底で囲まれたエントランスロータリー
 - ③ 校舎とグラウンドの間の校内通路
 - ④ 昇降口まで屋根付き通路で結ぶ駐輪場
 - ⑤ 展望デッキの下の給食搬入口（ここだけ定時に歩車交叉）
 - ⑥ マウンドで覆われた駐車スペース（6台）
 - ⑦ 将来小学校統合用地となる芝生広場
 - ⑧ 既存樹木の存置活用
 - ⑨ 北東に向かう野球グラウンド（両翼約80m）
 - ⑩ 周囲にゆとりのある200mトラック
 - ⑪ 既存駐車場の存置活用
 - ⑫ メディアセンターと交流ホールに挟まれた自然の中庭
 - ⑬ スタジオ、アトリエと連続する創造の中庭
 - ⑭ キッチンと連続する憩いの庭
 - ⑮ 外周サービス車路

【配置図 S=1/2,000】

- ⑦ エントランスロータリー、芝生広場とグラウンドを見守る教務センター
- ⑧ 体育館入口脇の地域連携室
- ⑨ 教室（マルチユニット）に囲まれたメディアセンター
- ⑩ 交流ホール
- ⑪ コミュニティラウンジ
- ⑫ 体育館
- ⑬ 南側、東側に面した教室
- ⑭ 体育館と屋外機械置場を囲む曲面壁（隣地境界との距離を5m以上確保）
- ⑮ 将来の小学校統合のための増築時に、教務センターと昇降口の増設と共にグラウンド側への通り抜けピロティを設ける
- ⑯ 中庭へのメンテナンスのための進入口

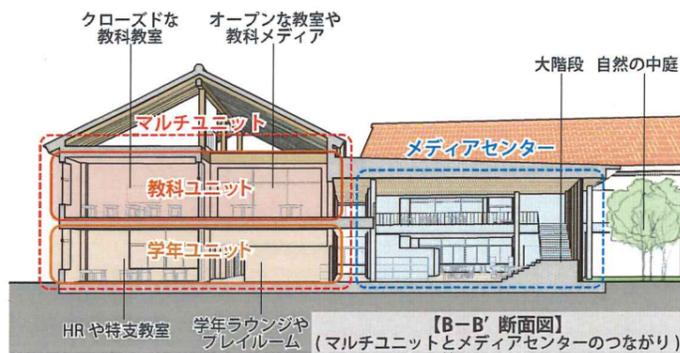
(2) 地域の価値を高める快適で美しい学校

- 校舎は2階屋根を五寸勾配の石州来待瓦として、2階妻壁部の意匠と共にこの地方の民家を象徴し、周辺環境との調和を図る。一方、体育館のグラウンド側のギャラリー連続窓や深い屋根底に覆われた昇降口廻りのガラススクリーンに現代的なデザイン要素を加え、新旧調和のとれた新しい景観をつくる。
- 校舎棟、体育館は共にアプローチ路に沿って、躍動感のある配置とし、日々登校時に生徒の気持ちを高める。
- 体育館はたたら高殿、校舎棟と共にたたら山内のイメージで構成し、盆地の中に民家が点在する牧歌的な景観の下に埋もれる鉄穴流しとたたら製鉄の歴史を呼び覚ます。
- 体育館の外縁部は円弧を描く壁で屋上機械置場を囲み、やわらかく周辺民家との間を隔てる。
- 北側の校地内高木は存置し、新校舎の印象を元々そこにあったかのような佇まいとする。
- 軒庇をしっかりつけて外壁を守り、時を経て魅力を増すようなディテールとする。
- 中庭には外周サービス車路からメンテナンス進入口を設け、雪かきなど維持管理を容易にする。
- この地方で卓越する北西風（あなじ）と盆地特有の上昇気流との複合特性をつかむため、既存校舎に簡易気象観測装置をつけて、敷地内の微気候を把握し、校舎の大屋根は木造小屋組みを表し、マルチユニットの結節部分や妻壁を用いて通気高窓を設けるなど、風の通り路をデザインし、夏場の冷房負荷を最小限に抑える。
- 冬場の暖房のために1階床下に地中蓄熱式放射床暖房を設置し、ローコストで快適な放射暖房とし、2階の要所に床暖房やラジエーターを補完的に整備する。
- コミュニティエリアのスタジオ、アトリエの屋根に太陽光発電装置（20kW程度）を設置し、日常電力の補完と災害避難所電源の一部に充てる。



【アプローチ路からの景観イメージ】

(3) 学ぶ側、教える側 双方に寄り添う実質的な教育実践の場



メディアセンターを中心にすえた、ホームルームと教科センター

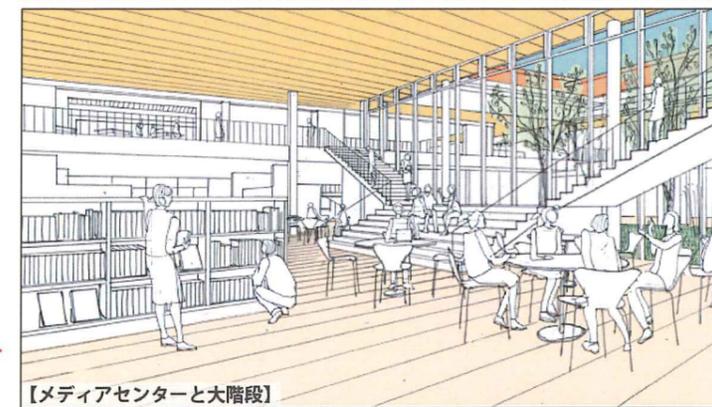
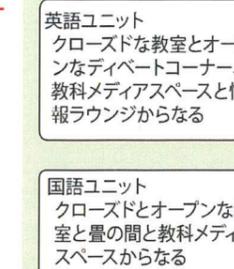
- 8×14.4m の無柱空間を内包する 12×14.4m の二層空間をマルチユニットと称し、1階(学年ユニット)は2つのホームルーム(HR)又は特支教室を中心にロッカースペース(LS)と学年ラウンジからなるホームルーム運営を中心とした学習空間とする。2階(教科ユニット)は教科別の教科センターとし、クロード・オープン両タイプの教室とラウンジや教科メディアからなる生徒の自発性を促す学習空間とする。
- 各ユニットの内部空間は可変性に富み、教育目的に合わせて個から集団へと自在に学習空間をつくりこむことが出来る。
- メディアセンターを中心に、1階はHRから学年ラウンジをへてメディアセンターへと繋がるホームルーム活動を基盤とする異学年交流の場を形成し、2階は各教科のメディアが独自の空間を形成しつつ、学問体系を表すようにメディアセンターに求心的に統合され、学習者が自発的に興味を発展させる学習空間を形成する。このように1,2階で異なる視点に基づくユニットがメディアセンターを中心に求心的に融合する小規模校ならではの学習空間が形成される。

生徒や保護者のみならず、教職員にとっても快適な教務センター

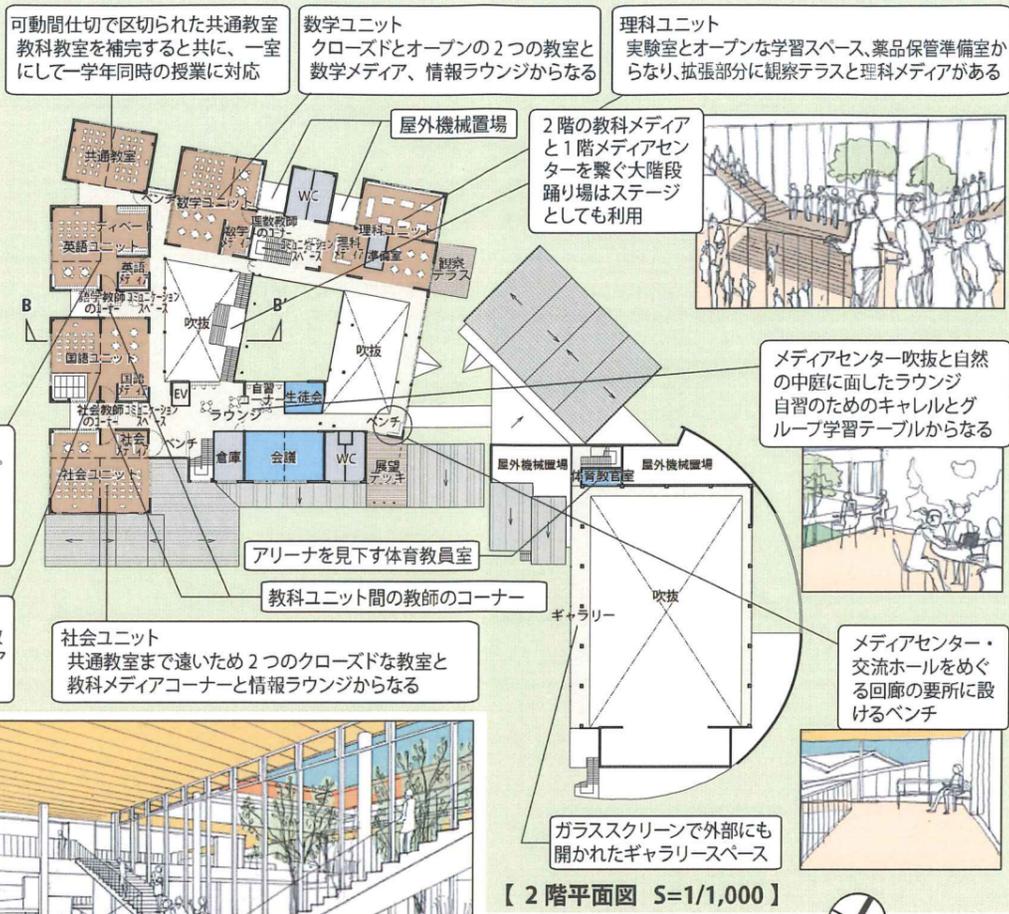
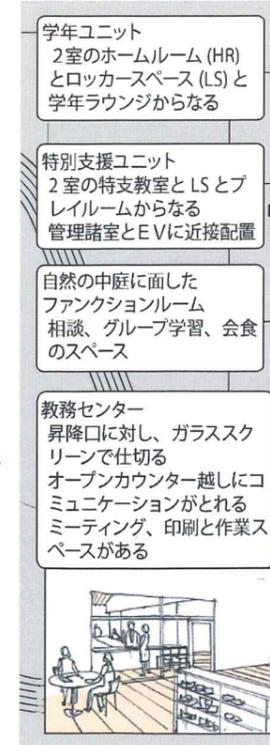
- 昇降口は各学年ごとに下足箱で仕切り、来客・職員用、車いす専用の仕切をそれぞれ設け、それらの正面に教務センターを設け、ガラススクリーンの仕切の中にオープンカウンターを配置し、教職員と生徒や保護者とのコミュニケーションを円滑にする。
- 教務センター内にミーティングスペース、印刷室、大きな作業台を設け、更衣室とラウンジスペースも隣接させ、教職員が働きやすい環境をつくる。
- 教務センター、保健室の周辺にタイプの異なる相談室(自然の中庭に面したファンクションルームを含む)を設け、生徒の心のケアに必要な対応を取りやすくする。
- 校長室に応接セットとミーティングテーブルを設けると共に、2階に2室に分割できる会議室を設ける。
- 倉庫、教材庫を重視し、適所に配置する。

生徒の居場所となる屋内外をつなぐ緩衝空間

- 自然の中庭に面するメディアセンター大階段の中央踊り場はステージとして生徒の表現の場を提供する。
- 自然の中庭や創造の中庭、憩いの庭には屋根付きのスペースを設け、生徒の思索やくつろぎの場とする。
- メディアセンター、自然の中庭、交流ホールまでを囲む2階回廊にラウンジを設け、自習のためのキャレルやグループ学習のための大きめのテーブルを配置すると共に、回廊の要所にベンチを配置し、様々な状況での生徒の居場所をつくる。



【メディアセンターと大階段】



【2階平面図 S=1/1,000】

【1階平面図 S=1/1,000】

メディアセンター
生徒が一日中いつでも利用でき、様々な学習形態に対応
司書ボランティア活動やテレワークの場として地域開放する

交流ホール
創作キッチンの試食スペースやランチ
ルームを兼ね、様々なイベントにも活用

中庭の一部に屋根付きスペースを設け、
思索やくつろぎのスペースとする

スタジオ、アトリエ
創作のための実習室
授業、部活、地域利用
を想定

開放玄関
地域連携室、体
育館、コミュニ
ティラウンジなど地域
利用の玄関

(4) 地域と共に子供たちを見守り、育てる協働の場

いつもだれかが居て、何かをやっているコミュニティラウンジ

- コミュニティラウンジは生徒と地域住民に開放されたフリースペースとする。地域連携室に設けたキッチンを利用することで、カフェサービスまで実現できたり、ディスプレイ台があり、季節感のある展示が生徒や地域住民の手によって更新されることで賑わいをつくる。

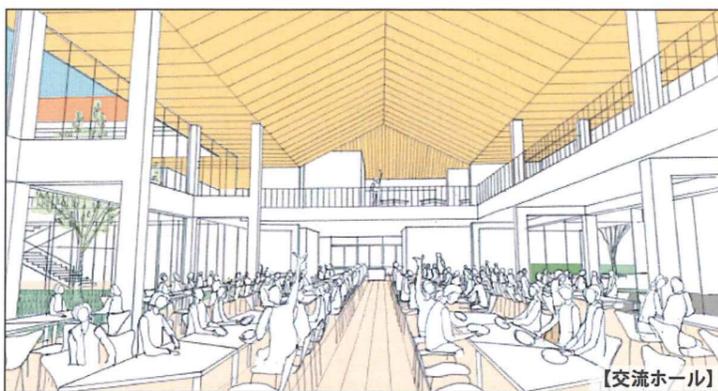


【コミュニティラウンジからの様子】(左手奥は創造の中庭、右手奥はアトリエ、スタジオ)

- スタジオ、アトリエは授業のための音楽室、美術・技術室であると共に、部活や地域住民の余暇活動の場を提供する。また、体育館に近接し、発表会のリハーサル室や控室となる。
- 体育館と地域連携室との間に地域開放玄関を設け、コミュニティラウンジを含めて、地域利用の範囲の設定を容易にする。
- コミュニティラウンジに面した創造の中庭は、たたき仕上げとし、生徒や地域住民の創作活動の場となる。

地域活動と学習活動が交わる交流ホール

- 交流ホールは全生徒が集まるランチルームであると共に、様々な学習形態や電動スクリーンを設けて講演会などのイベントに利用できる。
- 2階吹抜の天井を地域産の杉板張りにし、両サイドが2つの中庭に面する等、開放的で学校と地域の協働を象徴する空間とする。
- 体育館の機能を補完するため床は体育館仕様とする。



【交流ホール】

第2の公共図書館としてのメディアセンター

- メディアセンターは一日中生徒の利用に供することを前提に運営への地域参加(図書館司書ボランティア)を促す。
- 地域住民のメディアセンター利用を促し、テレワークをする保護者と生徒が共に机を並べる新しいライフスタイル実現の場を提供し、若い世代の移住定着につなげる。
- メディアセンターと教務センターとの近接が地域開放利用に当たって、安心、安全、安定を高める。

(5) 工事中の安心、安全、安定に配慮した工事ステップ

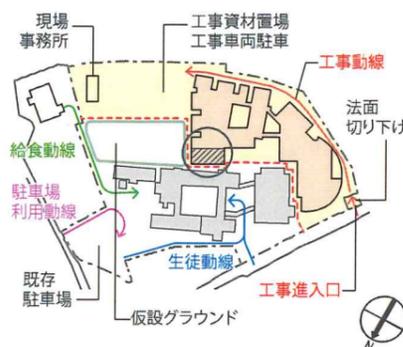
- ・工事計画に当たっては既存校舎を利用しながらの施工となることから、生徒をはじめ全ての来校者の日常動線を維持すると共に、工事サイト（現場事務所、工事車両駐車、資材置場）を確保した上で、生徒の学習空間としてのグラウンドを可能な限りまとまった面積で確保する。
- ・既存校舎に近接する1階部分は平屋とし、工事の終盤に施工する等の工夫を行うなど、可能な限り既存校舎の学習環境を維持する。

具体的な工事ステップ

〈ステップ1 校舎新築工事〉

- ・北側道路から西端法面を切り下げ工事進入路を確保し、南側隣地境界に沿って工事進入路を確保する。
- ・既存校舎に対する登下校動線、給食サービス動線、駐車場利用動線の変更はない。
- ・工事サイトとのスペースの取り合いとなるが、東側に比較的まとまった仮設グラウンドを確保する。
- ・既存校舎と最も近接する新築校舎の教務センター部分は平屋のため工事の着手を最終盤まで延ばし、既存校舎の南側採光を確保し、学習環境を維持する。
- ・外構工事としてグラウンドの南側部分と建物周辺整備を行う。

工事期間：17カ月



〈ステップ2 既存体育館解体・仮設外構工事〉

- ・新校舎に引越後、既存校舎内を登下校動線と給食サービス動線として活用し、新校舎の昇降口とつなぐ。
- ・既存体育館を安全区画し、ステップ1から引き続き西端進入路を工事車両進入路とし、既存体育館解体を行う。
- ・解体跡地は最終形のエントランスロータリーとアプローチ路を仮舗装仕上げとし、芝生広場の位置に仮設駐車場を整備する。

工事期間：4カ月



〈ステップ3 既存校舎解体工事〉

- ・工事に設けた西端進入路を仮正門として、仮設アプローチ路と仮設駐車場を利用し昇降口にアプローチする。
- ・給食サービスはこの期間、公道経由で仮正門及び仮設アプローチ路を利用し、配膳室に至るルートを用いる。
- ・解体工事車両の進入口は既存正門を利用し、既存校舎解体を行う。
- ・既存校舎解体後、グラウンドの北側部分、アプローチ路、エントランスロータリー廻り及び芝生広場を整備する。

工事期間：6カ月



〈ステップ4 外構工事〉

- ・グラウンド全体の最終仕上げと防球フェンス等の囲障工事を行う。
- ・最終的に正門及び西端進入路の復旧整備を行い、すべての工事を完了する。
- ・この工事期間に細かい仮設の切り替えが必要。

工事期間：4カ月



(6) 生徒主体でつくる建築

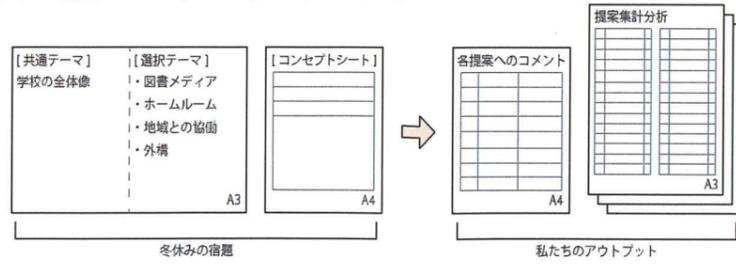
個から集団へ 多様性の統合へと導く設計プロセス

- ・生徒、教職員、地域住民、邑南町および教育委員会、設計者、すべての関係者の意識の統合によって良い設計が実現できる。この意識の統合作業を創造的で価値の高いものにするために、「未来のために」という深い部分での共通認識が必要となる。
- ・未来を最も体現するのは生徒であることから、生徒主体でつくる建築にすることが大切である。生徒たちの思いの本質的価値を設計者を中心に見出し、それを地域と学校が共有する手法をとる。
- ・生徒主体でつくる建築のワークショップを含む一連のプロセスは生徒自身の創造力を育成する教育の一つの方法でもあることから、このプロセスについて設計者と教職員の協働が欠かせない。このことを前提として、私たちの実績を踏まえたワークショップの概要を以下に提示する。

本業務におけるワークショップの概要

- ・生徒に、教科センター方式（福井市安居中などの例）、異学年交流や地域交流の大切さについて紹介する。
- ・生徒に冬休みの宿題『こんな学校があったらいい～石見中学校の未来像～』（A3提案書一枚とA4コンセプトシート一枚）の提出の協力を求める。提案は学校の全体像を共通、図書メディア、ホームルーム、地域との協働、外構を選択とする。
- ・すべての提案の分析をすると共に1つ1つの提案に対して設計者として感じたことや、建築設計に取り入れる場合の工夫などを記載したものを整理する。これを共有することを出発点として、教職員や地域住民とそれぞれの課題についてワークショップを実施する。
- ・設計者のレポートによる全体の傾向についての整理データと共に、一人一人への応答を生徒各自に返し、希望者からはそれに対する質疑や再提案を受けると共に、状況を見つつ、教職員の判断に基づき、適切な単位での生徒のワークショップの実施を検討する。
- ・生徒、教職員、地域住民それぞれのワークショップの進行に当たって、他のグループの成果を共有しつつ回数を重ねる。
- ・このようにして学校や地域の課題を解決しつつ、生徒の思い（石見中学校の未来像）を実現するワークショップとすることができる。

【冬休みの宿題 アウトプットのイメージ】



【業務工程表】

	2020年度 (R2年度)			2021年度 (R3年度)		
	11	12	1	2	3	4
打合せ条件整理	インフラ調査 事前準備 教育委員会との打合せ				主要なミーティング (現地実施)	一回のミーティングに向けて zoomで意見調整
基本設計	ワークショップ ケーススタディ	冬休みの宿題				
調整、協議等						
その他 (業務外調査等)						

(7) 学校づくりから人づくり、地域づくりにつなげる継続的なシステム

- ・子どもからおとなへの過渡期にあたる中学生にあって、自己の成長欲求を満足させることは容易ではない。過度に情報が行き交うネット社会への対応という大きな変化はもとより、昨今の感染症への対応、国際社会の自国優先主義への変化といったことも子どもたちに与える影響は大きく、このことをより困難にしている。
- ・それに対し、地域の力を最大限活用するという、邑南町だからこそ実現できる取り組みにチャレンジしたいと思う。このことは一朝一夕で実現できるわけではなく、継続的なシステムの構築が必要だと考え、以下にその概要を示す。

地域の人たちが教科のメディアスペースの充実をサポート

- ・教科の取り組みの変化や赴任してきた教員に合わせて、地域の人たちも一緒になって教育環境の整備に取り組める可変性の高い教科メディアスペースをつくる。一部、地域の人々と教職員の協働によるDIYによって内装工事も実施する。地域の人たちが参加することで教育の厚みが増し、邑南町独自の魅力を具体的に深く学ぶことにつながると考える。例えば、「オオサンショウウオを見つける!」取り組みをテーマにすれば、独自に自然と向き合ってきた地域のおとなの経験を活かすことができ、それが地球規模での環境変化への視野を広げることにまで繋がる。テーマへの取り組み内容をメディアスペースの整備に反映することで、地域の人々にとっても、その取り組みを通じて新しい視点に気付かされる可能性があり、地域の魅力を高めるきっかけにもなる。

石見中学校の整備をきっかけとした「おおなん協育プロジェクト」の発展

- ・食を通じた地域の魅力の発掘と同様、独自の教育を通じて地域の魅力を高めることができると考える。例えば、地域の人たちをはじめ、矢上高校の「総合的な探究の時間」にも協力してもらい、邑南町の中学校の課題と可能性について共に考えるワークショップを実施する。地域の多様な人々（県外からの高校生を含め）が中学校に関わる方法について模索できれば、具体化に向けてこれまでにない活力を得ることができる。

□防災トピック

- ・邑南町指定緊急避難所として位置づけられており、周辺住民の想定1,430人の避難所となることから、災害の程度によっては大規模なものになる。建物の安全性は耐震基準を1.25倍することはもとより、外部電源車を利用した電源供給や体育館倉庫屋上への受水槽設置により、安定した避難所機能が維持できるようにする。
- ・体育館廻りに備蓄倉庫を設けたり、憩いの広場へのカマドベンチの設置、体育館西側メンテナンス車路部分へのマンホールの設置等を行う。
- ・避難所が長期化した場合の学校再開の時期をにらみ、体育館が仮に避難所であり続けた場合も交流ホールをあらかじめ床をスポーツ仕様とすることで仮体育館として利用するなどの措置を講じる。
- ・冬季の避難も想定し、校舎、体育館を含めて地中蓄熱式輻射床暖房設備の導入を検討する。

【防災計画図】

